
主人は友達が少ない

紫炎-sien-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人は友達が少ない

【Nコード】

N7784X

【作者名】

紫炎 - s i e n -

【あらすじ】

交通事故で記憶喪失になってしまった俺。命の恩人の『柏崎星奈』様を誠心誠意護れたら良かったのに・・・方向性も活動目的も一切不明な残念系の部活『隣人部』に入るなんてっ！！星奈様、お気を確かにいっ！！

古びた記憶（前書き）

わりと不定期更新になるかもです。

星奈様の忠実な犬である私が星奈様の人生を明るくして見せます！！

って感じの小説にしたいです

古びた記憶

三

柏崎星奈かしわざきなと言う名前には聞き覚えがある。それは確か、小学校低学年の時だった・・・

その娘は、数人の男子に虐められて泣いていた気がする。男が寄つて集たつて一人の女の子にチョツカイを出すなんて情けがない。まあ小学生の頃は好きな女子に嫌がらせをするのが普通だったのだが・・・今にして思えばそれは過去の話なのであるが、彼女は俺の方を見て笑いながら『ありがとう』を言った気がする。別に大したことなんてなにもしていない・・・

三

目が覚めるといつもの教室風景の中にいた。

正確には進級して高校2年生になったのであるが、教室が変わっても教室の中身はまったく変わっていない気がする。

強いて言うならカレンダーの位置とか花瓶の位置が違ったりするんだろうけど、授業なんて口クに受けちゃいないんだから教室の中になんて興味の欠片もない、俺に言わせりやタダの箱か何かだ・・・俺は前を向きもしなければ、後ろも向いちやいないし、見えても見えなくても意味がないわけなのだが・・・

俺が見ているのは自分の体で作り出した暗闇と夢だけ・・・

ココまででお察しいただけない皆様の為に一応の身分説明を・・・俺は言いわ謂不良、ヤンキーの類に属している。

それも割りと質の悪い部類なのだろう。

この『聖クロニカ学園』と名は大層な学園で、私こと八代陸奥^{やしろむつ}は敵に回したら同日が命日とまで言われている。

俺以外にも何やら悪名高い輩は居るようだが、正直知らないし興味もない。

と言いますか、俺にだって信念くらいは有るもので『女子供には手を出さない、お年寄りには労る、そして「敵以外には手を出さない」』
ってものがある。

だが、入学式当日に目つきが悪い俺は先輩に呼び出された。

そのの正当防衛のはずが、目撃情報から噂の一人歩きで高校生活で声をかけてきたのは俺を仲間にしようとする連中か、敵意むき出しの連中か・・・

その伝で何人かの生徒も脅しているわけで、もはや取り返しなんてつくはまらない。

そしてつける気もないから、この話はココで終わる。

今は昼休み。

昼食も食わずに惰眠を貪って、そろそろ腹が空き始めた頃合いだと思つて教室を出ようとおもった。

立ち上がり周りに視線を移すと瞬時に人目が逸れていく、なんとも気持ちがいい瞬間である。

誰も俺の事なんて興味がない、存在しないものとして扱う。

人に気を使わなくて良いとは何とも楽なものである。

だが、一つだけ気になるとするのなら入り口の周辺一角がウルサイ。堂々と歩いていき中心の中にいる生徒へ一言だけ言つてやった。

「うるせえ、そこ退けろよ。」

「はあゝっ、アンタ誰に向かって口きいてるわけ!？」

おおっと、コレは予想外な反応だった・・・
コイツは俺のこと知らないのか？
そんな疑問を募らせながら、その女生徒の顔を確認した。

「・・・・・・・・」

柏崎星奈だった・・・
今年から同じクラスになったんだ・・・

「なにいきなり黙ってんのよ、聞いてんの!？」

「せつ、星奈様・・・コイツ八代ですよ・・・」

「ま、マズいですよ八代は・・・」

「ココは穩便に済ませて逃げましょう・・・」

「はぁっ!?!このアタシが逃げる?信じらんない!」

「で、でも・・・」

「ちよつと八代だっけ?まあ、名前なんてどうでも良いわよね?ヒザマズいてアタシの靴嘗めさせてあげる、ほら出来たら通してあげるわよ?」

「フザケるな、退ける。イジメられっ子がイジメっ子にジョブチェンジか、あぁっ!?!」

「ひっ、そ・・・そんなんじゃないもん!」

「・・・チツ、邪魔だからさっさと退け。テメエら脂デブも邪魔だ、潰すぞ!」

まあ、ココまで言えばビビって退けてくれるしな。
でも、柏崎を泣かしかけてしまったな。
・・・反省。

その日の夕方、さつさと帰って晩飯の準備でもしようかと大急ぎで校門を抜けバス停を通り過ぎようとした瞬間。
誰かに横から押されて・・・おいおい、これヤバッ・・・っ!!

普通に走ってきたトラックに引かれてしまったのか？
少々派手すぎる吹っ飛び方だったと思うけど、今は生ぬるいアスファルトの上でボーッとしてる。

あつ、生ぬるいのは自分の血だったのか？
痛覚の麻痺からか痛みなんて全く無いな・・・
視界もボヤケて良く見えないし、眼球潰れてないと良いけどなあゝ
アレ、俺は何をしようとしていたんだっけ・・・？
そもそも誰だよ、俺の体を揺すってる奴は・・・

「・・・こ・・・えっ・・・!! ね・・・から・・・陸奥!!」

気がついたら白いシーツの敷かれたベッドの上で寝ていた。
窓から察するに、どうやら病院らしい・・・

アレ、俺って誰だっけ？

新しい始まり

俺は誰だったんだ？

頭の中でザーザーとTVの砂嵐みたいなのが鳴り続けてる・・・
思い出せない、思考が纏まらない。

不意に体に激痛が走る、またこの感覚である。
馴れたような、何度目かの痛み・・・

突如病室の扉が解放される。

ノックなんて物はなかったが、マナーがなってないな。
慌ててるのか？

入ってきた人物に目を向けてみた。

「ちょっとアンタ、大丈夫!？」

「アナタは・・・？」

俺の記憶の途切れる寸前に映った娘だった。

泣きそうな顔で懇願するような、子供のような顔をしてすがり付いてくれた彼女。

さて、彼女は俺にとってどんな存在なのだろうか・・・？
付き合っているとか？

無いな、それは流石に無いと思う。

俺が誰かは知らないが、こんな美少女を侍らす才能あるとは思えないもんね、まあ詳しくは知らんが。

「俺は何者ですか？アナタは俺の何なのですか？」

「うわっ、喋り方キモッ！！」

「ああ、割りと失礼ですね・・・まあ、良いですが」

「当然じゃない。あたしの名前は柏崎星奈、アンタの命の恩人にして、アンタのご主人様よ！！」

「成る程・・・俺は今現在記憶喪失を体感しているから柏崎さんの事は思い出せないが、なんと呼べば宜しいでしょうか？と、こんな喋り方で大丈夫でしょうか？」

「・・・そ、そうね。良いわ、問題ない。あたしの名前ですることを許してあげる。あとは何でも言う事を聞くように。」

「承知、では星奈様ご命令を・・・」

「んじゃ、そうね・・・元気そうだしさっさと退院して学校であたしの為に働きなさい。」

「承知しました、ではお休みなさい。」

どうやらご主人様は俺に回復を望んでいるようだ。
睡眠をとって体を休めるとしよう。

「つて、ちよつと待てえっ！っ！！」

「・・・何でしょうか？」

「ほんつとに記憶喪失なわけ！？」

「その様で。」

「そ、そうなんだ・・・」

「今ある最初の記憶は星奈様がすがり付いて泣いていた所です。」

「なっ！！泣いてないわよ、バカノノ」

「左様で・・・心配をお掛けしました。」

「そつか・・・じゃ、あたしは帰るから土日で体を治して月曜から学校に来なさいよね!？」

「それが命令であるなら、無論の事です。」

「命令に決まってるじゃない。」

そう言いながらご主人様は部屋を出ていった。

壁に掛けられたデジタル時計に表記された曜日は金曜日。

明日、明後日で体を急速回復させて退院。

俺の家族ってどんな人なんだろう・・・

日曜日である。

昨日は家族らしい女性が2人現れて少し気が動転したけど、まあそれなりに話が出来て良かった。

俺の名前や素性も少しだけ分かったし・・・

そして今は体もスツカリ完治して軽く走り回れるまでに回復した。

それには医者も驚いていたが、俺自身も正直驚きが隠せない。

そう言う体質と言ってしまったえばそれまでののだが、どう言う体の造りしてんだよ俺は・・・

そんなこんなで回復して暇な俺は病室を抜け出して散歩に来ていた。

公園。

と言うには少々寂しい感じだ。

噴水とベンチ以外にあるものは・・・何も無いな。

ストリートパフォーマーや、それを暇そうに見る人達、カップルが何ペアか居たりと人数は少ない様だけど、やはり多いとも言いたい。
辛い。

その中で1人だけ俺の事を見てる奴がいる。

別に人に見られても別段問題は無いのだが、何やら悪意を感じずにはられない・・・

「あの、俺なにか変ッスか？」

「いや、あの、その・・・なんで・・・」

「んっ!？」

「あぁっ・・・ううっ・・・ごめんなさぁ〜いつ!〜!」

急に後ろを向いて凄いい勢いで逃げて行ってしまった・・・
なんだっただんどう？

仕方がないのでこの事は忘れて散歩を続行することにした。

公園を通り過ぎると今度は大型ショッピングモールが見えてきた。
服は病院からそのまま着てきてしまったし、財布も無いから所持金

ゼロ。

ケータイも所持してない。

仕方がないから諦めて回れ右して帰路につくとうしよう・・・

「八代さんっ、ちわっス!!」

「えっ?」

不意に自分の名字を呼ばれて振り返ってしまった。
振り返らなければ良かった・・・

「どうしたんスカ、こんな所で一人ッスカ? 服も病人みたいじゃないッスカあゝ」

「えっ・・・ええ・・・」

「まさか闇討ちに遭ったんスカ!? 許せねえ・・・今から御礼参りしましょうや、ツレ呼ぶんで待っててください!!」

「いや、あの・・・アンタ誰?」

「はっはっはっ、なに言ってんスカあゝ? 俺は八代さんの舎弟1号ッスよ」

「舎弟・・・1号っ!? 1号って事は2号以降もいるのか!?」

「当然じゃないッスカゝクロニカ占めたの八代さんじゃないっすか!」

「いや、その・・・非常に言い辛いんですが、俺は記憶喪失になっ
たんでアンタの事知らないんだ。ってか、俺は元ヤンですか?」
「・・・ええっゝ、マジッスカ!?!」

「マジです、大マジです。分かったなら離れてください、タバコ臭

いで……」

「じゃ、その服も記憶喪失に関係がつ!?」

「トラックに引き飛ばされて記憶喪失だったかな?」

「トラックに引かれて生き残る八代さんマジかけえ……」

「いや、そんな事言われても全然嬉しくない。」

「トラックの運転手のタマ取りに行きましようやつ!」

「……!?俺の話聞いてたあゝ!?」

大声を張り上げて突っ込んでしまった……

スキンヘッドに青い刺青の男と絡んでしまった……

取り返しがつかないな、周りの目が妙に気になる。

つと言うより痛い。

かなりグサグサ来てる様な気がする……

「立ち話もなんつすから店中でゆつくり話しましょうや。服も着替えないとアレじゃないっすか?」

「いや、金ないし」

「あつ、自分買わせてもらうんで大丈夫ツスよ」

「いや、流石にそれは……」

「なに言ってるんすか?俺は八代さんの舎弟1号なんすから当然の事じゃないっすか?八代さんは記憶無くしてもマジ遠慮深いツスねあつ、でも今日は優しい……」

俺はどんな人間だったんだよ……

舎弟抱えのヤンキーで、クロニカって学校を占めていて、柏崎星奈の従者で……

コレはコレで凄い設定だなあ
アレ・・・でも俺に友達なんて居たのか？
って、おい！！

人の手を気安く引つ張るな！！
手を握るな、気色が悪い！！
周りの人にガン飛ばすなあっ！！

グイグイ引つ張って男性服のコーナーへ連行されて何着か手渡された。

どれも厳ついお兄さんが着そうな奴だ・・・

「いやあゝやっぱ、八代さんにはコレかなあゝ？」

新たに服が追加された・・・

「八代さんどんなのが良いツスカ？」
「・・・任せる。」

こんな調子で必要最低限しか口を開いてません。
ってかこの人恐いんですけどっ！！
不意に人集りが気になった。
別に騒がしかったりだとかではないのだが、一ヶ所で何かを取り囲んだ様な大きな集団だ・・・

良く見ると、イカした兄ちゃんの集まりの様な気がする。
関わらないのが得策。

なのだが、その集団の中心には『柏崎星奈』様がいた・・・

「・・・不幸だ。」

「どうしたんです、八代さん？」

「いや、ちよつと・・・知り合いが困ってるみたいで・・・」

「マジッスか!？」

「ちよつと行つて見てくる・・・」 「御供しますよ」

「いや、一人で大丈夫。」

「流石クロニカの一匹狼!」

変な二つ名が加わつた・・・

それはあえてスルーして、その集団の渦へ体当たりしていった・・・

心機一転な登校

「ちょっと、すみません・・・」

そう言いながら怖いお兄さん達の合間をすり抜け、柏崎星奈の前まで行く。それからゆつくりとした口調で話を続ける。

「彼女、自分の連れなんすよぉ」

「八代・・・陸奥・・・」

「・・・ヤベエ・・・」

「なんでお前がぁあぁあ!!」

そう言いながら解散していく怖いお兄さん達。どうやら一難去ったような感じである・・・
が、今度はどっちに転びのだろうか。柏崎星奈の目が怖い・・・

「アンタ・・・」

「・・・はい・・・」

「まあ、助かったわ。流石にアンタは顔が利いて便利ね。記憶は戻ってないようだし・・・」

「戻ってないです。」

「良し良し良し!!」

「えっ？」

「いや、コッチの話よ。それより、ちょっと買い物に付き合いなさいよ?」

「御意。」

「アンタ昼飯は?」

「まだです。」

「そう・・・じゃ、アタシが“特別に”奢ってあげるわ」

「いえ、自分でなんとか・・・お金無いんだった・・・」

「意地張つてないで素直に行為を受け入れなさい。あつ、それとも踏んだ方が喜ぶ!？」

「えっ!?!いや、痛いだけでは・・・?」

「そう、アタシの周りに居る男子は踏まれて喜ぶような奴ばっかだからアンタもそうかと思っちゃったわ。」

「そんな・・・男を一括りにしないで下さい。」

ハアと溜め息を吐き、柏崎星奈の三歩ほど後ろを歩く。

―夕方―

沢山の服を持ち、彼女を家の前まで送り病院へ戻ると既に退院扱いで部屋のプレートが外されてたのを見てナースステーションの女性に話しかけ、家の位置を教えてもらい帰宅した。

記憶喪失・・・

マンガやゲーム、ドラマの中の話だと思っていたのに自分が身をもつて味わうことに成るなんて思いもなかった・・・

前の自分はわりと人に避けられる性格だったらしいけど、クラスで上手くやっていけるのだろうか？

そもそも俺のクラスの雰囲気と違って大丈夫なのか？

クラスに馴染めるか心配だ・・・

星奈が羨ましいぜ・・・

「はぁ・・・」

電気を消した自室に一人。

肌寒い季節外れの空気を体いっぱいを受け、今度は眠そうな欠伸を漏らした・・・

母親が早くに他界し、父は単身赴任で、家出し行方不明の姉。

仕送りでは足りない生活費を稼ぐためアイドル候補生に成った妹、家で寂しく一人待ちの小学生の妹と三人暮らし。

なんか凄く複雑な家庭環境なんですけど・・・

でもまあ、心配しても始まらないし今日は一先ず寝て、明日に備えよう。

これからの事は、明日に成れば分かるよな？

――翌日――

誰も俺には目もくれない。それが俺のクラスでの立ち位置なのかは分からない。だが記憶喪失、それが今までの印象を拭うための鍵になるかもしれない。

「お、おはようっ！..!」

努めて明るい声を響かせるも、教室中の生徒が顔を背ける。
悲しいかも・・・
それならと、男子生徒に声をかける・・・
体を震わせ怖がられてしまった・・・
女子生徒は涙目になりながら俯いてしまう・・・

だが喋る相手が居ないのは俺にとっても寂しいのだ。一人くらい
友達が欲しい！！

「ちょっと!!」
「あ、柏崎・・・星奈さん」
「様付けで呼びなさいよ。」
「・・・星奈様。」
「よろしい。で、アンタは何がしたいの？」
「友達を作ろうかと・・・」
「アンタバカじゃないの!？」
「失礼ですね。」
「事実だから仕方ないじゃない。」
「・・・」

目に涙を溜めながら彼女の目を見つめる。

「あ、アンタはあたしだけ見てれば良いのよ。他の女に話しかけないで!!」

「それって・・・」

「全然嫉妬とかじゃないんだから。勘違いしてんじゃないわよ!？」

「・・・」

「なっ、なによ!？文句あんの!？」

「いえ・・・」

会話はチャイムの音と共に打ち切られてしまった・・・

コレがツンデレと言う奴か？

心機一転な登校（後書き）

そんな感じで短めの更新です。

こんな駄文小説に需要とかあんのかな・・・

出会い

交通事故から二ヶ月程が過ぎた日曜。日曜朝の8:30と言えば女児学生がテレビの前でアニメを見るのが定番な時間らしく、俺の妹（三女）もテレビに釘付けである。

番組が終了するとテーブルの前に座り物欲しそうな顔で見てくるので、作りたてのホットケーキをテーブルに乗せると「ありがとう」と言いフォークを握る。なんとも可愛らしい我が妹2号の光ちゃんです。

ホットケーキに夢中の合間に洗濯物を干し、ついでに布団も干しひと段落ついた頃にアイドル候補生とは思えない妹（次女）が起きてきた。寝間着を着崩れてるし、髪の毛ボサボサで大変なことになっている。

そんな事はどうでも良いのだが、この娘の俺に対する態度が酷い。言葉使いや行動が嫌がらせに近い・・・

「兄貴、ご飯が食べたいの」

「ホットケーキがあるだろ？」

「お米がいいの」

「冷凍ご飯温めれば？」

「兄貴がやれなの」

「いや、そろそろ風呂掃除して・・・」

「やれ、クソ兄貴」

「・・・はい。」

言い返せないまま二言返事させられてしまった。このクソ忌々しい妹1号が響です、はい。

「おい兄貴、今失礼なこと考えたろ？」

「いえいえ、あつ！解凍終わった・・・」

「早く持ってくるの」

「熱いから気をつけて・・・」

御茶碗を置き、時計を確認する。10:13、今日はどつ過ぐすベきか・・・

不意にケータイが光っているのに気がつき手に取る。たぶんアレだな・・・

『新着通知三通：柏崎星奈』

彼女からのメール数は凄い。平日の昼休みに10通来ることもあったりもする・・・

ちなみに内容を読み上げさせてもらおう。

「8:23、暇でしょ？買い物に付き合いなさいよ・END・9:00、ちよつとメール確認したの！？返事しなさいよ・END・9:27、ねえ、メール届いてる？お願いだから返事ちょうだい・<・END・・・・マズいな・・・」

このパターンだと確実に星奈は怒っている。今までの経験上怒っているor涙目のどちらかしかない。そして、この泣きそうな文からして確実に返信が来ないのを泣きそうな目で待っている。そして、電話をすると怒られる・・・

でも、このまま放置するというのも酷な話だよなあ・・・もう一時間近く前の話であるが、連絡一つしないのは酷いよな・・・

嫌々ながらケータイの電話帳から『か』行を選択し、数少ない人名から柏崎星奈を選択する。コール一回半で電話は取られ、濁声が響く。

「あのおゝ・・・星奈・・・様？」

「陸奥、遅い・・・」

「すいません、家事してたら連絡が遅れました。」

「火事！？」

「火事とはなんだ、物騒な。家事ですよ、それよりメール内容はまだ有効ですか？」

「と、当然よ！！でも、このあたしを待たせたんだから何か奢りなさいよね！？」

「昼飯で良いですか？」

「安すぎる！・・・けど、勘弁してあげるから早くあたしの家まで迎えにきなさい」

「今すぐ？」

「今すぐ！！」

最後にちよつとしたイタズラを込めてみたが、やっぱりご立腹の様だ。まあ可愛い可愛い。顔もスタイルも良いのだけど・・・性格に難があるんだよね、あの人・・・キャッチコピーは何だっけ・・・？

神がオーダーメイドして創ったとは思えない完璧な造形美、天の不平等を嘆く自由を与えるわ庶民ども・・・だっけ？

ホント性格だけがなあ・・・笑えば可愛いのに。

まあ、アイツも誰かの愛玩動物って訳じゃないから笑って座ってるなんて無理な話なんだけどなあ

そんな事を思いながら手早く私服に着替え出かける準備をする。ちなみに割りとスーツっぽい服装、ってか執事服みたいな感じ？星奈が選んだ服だけど、正直最初は妹に大爆笑された・・・ちよつと嫌な思い出。

「じゃ、兄ちゃんはやつと友達に呼ばれたからお留守番宜しく光ちゃん。晩ご飯何が良い？」

「ん〜と・・・じゃ、ハンバーグ。」

「了解、響ちゃんもハンバーグで良いよね？」

「うっせえ、さっさと行けよバカ。」

「はいはい、行きますよあ〜・・・行つてきまあ〜す。」

まったく響の奴は兄のことが大嫌いな様です。それに比べて光ちゃん是比较的大人しくて、ある程度言うこと聞いてくれて可愛いなあ……でもアレが響や星奈みたいになると考えると……ペツ、反吐が出る！！

小走りで星奈の家の前まで着いた俺は電話で家の前にいることを知らせる。それから数十秒で扉が解放され星奈が飛び出してくる。

「おはようございます星奈様、今日もお美しい（軽い棒読み）」

「当然じゃない。それよりさっさと電話くらいしなさいよバカ。」

「学年トップの頭脳明晰、運動神経抜群の星奈様に言われたら言い返す言葉もございません。」

「じゃ、行くわよ？」

そう言い、タツと駆け出す星奈を眺めながら後を追う。コレって周りから見るとどう見えるんだろ。恋人？兄妹？ただの女友達？結論は闇の中か……

「星奈様、そんなに慌ててるとコケますよ、コケた。」

「うう……」

「怪我はないようですね。」

「陸奥う．．．」

「はいはい、痛かったですね。怪我がなくて幸いです。」

立ち上がり涙ぐむ星奈の頭を愛撫し、スカートに付いた汚れを軽く叩く。それからまた歩き出す．．．

バスに乗り何力所かのバス停を経由してようやく繁華街へと駆け出す。その合間の会話は殆ど無し。沈黙の時間がひたすらに経過するだけである．．．

そして、大型ショッピングモールに入り星奈の服選びをひたすら眺め、感想を述べ、荷物持ちをする。何件かの店を見て回り何着もの試着をし気に入った服だけを2、3着購入し、俺が袋を持つ。昼にレストランで飯を食べ、今はフウ〜と一息吐きながら本屋で立ち読みし雑誌のギャグマンガで他愛もない談笑する。

「ははっ．．．すみません星奈様、少々お手洗いに行つて参ります。」

「

「ああ、そう。さつさと戻つてきなさいよ、次はゲーセンで景品を一杯獲つてやるんだから」

「はいはい．．．」

小走りでトイレへ急ぎ、手を洗い、また本屋へ急ぐ。

「はあ〜またか．．．」

何度も見て慣れた光景。柏崎星奈は買い物に来て俺が目を離すとすぐにナンパされる。今回は一人のようだが、質が悪そうだ。髪を染めてやがる、しかも中途半端な金髪に・・・

「星奈様から離れるよ、プリン頭!!」

「ええっ!?!」

「陸奥、待つて!!」

星奈の声と共にピタツと止まり話を聞く。

「つまり、星奈様はこの人から道を聞かれたと・・・」

「そう言うことなんだ、誤解させてスマン」

「まったく人騒がせな奴だ。頭も中途半端に染めやがって・・・道くらい店員か地図で調べろっ。」

「ううっ・・・」

「まったくダメエ〜どこ校だ!?!」

「聖・・・クロニカ・・・」

「・・・星奈様?」

「何よ・・・?」

「なんでもありません。」

「んじゃ、ホント助かった。ありがとう!!」

そう言い走って行った黄土色頭のヤンキー君。聖クロニカ・・・あ

んなヤンキーっぽい奴まで入れるんだ・・・人の事言えないっぽいけどさ。

「じゃ、ゲーセン行くわよ。」

「そうですね。」

シューティングゲームでゾンビを撃ちまくり、UFOキャッチャーで熊のぬいぐるみを獲り、妹たちの分の景品をゲットし、晩ご飯の材料を買って、また星奈とバスに揺られながら家路に付く。日も暮れ始め、星奈を家まで送り届けて家の近くのコンビニでアイスを買う。

ああゝ邪魔い。目の前で止まるなよ、なんだコイツ・・・？

「・・・三日月夜空・・・」

隣のクラスの不機嫌オーラを出しまくると噂の、実質俺も学校では一度しか拝んでいない三日月さんじゃないですか・・・こつちを振り返り睨なむ。つか、なんて恐ろしい子なんだ・・・

「邪魔だ退け。」

「三日月さんが退いてくれないかなあゝ」

「なぜ私の名前を知っている！？まさか貴様、ストーカーか！？」

「違っわっ!!」

あつ、突っ込んだじゃった・・・出来れば関わり合いを持ちたくなかった。

「ああ、お前良く見たらアイツと一緒にいる元ヤンか。」

「元ヤン言っな!!」

「ああゝああゝ近づくな。触るな触るな汚い前足で、汚れが移る。」

「怒るよ?」

「怒ってどうする?殴るのか、女を?」

「ごめんなさい、退けるんでもう勘弁してください・・・」

まさかコンビニの大人数の前で頭を下げるなんて・・・

その日は不快な感情で晩飯を作った・・・

入部は突然に

「突然だけど友達作りを手伝いなさい。」

「はっ!？」

「はっ!？じゃないわよ、聞こえなかったの?」

「いや、聞こえましたよ。普通に聞き違いであって欲しい台詞が、ね?」

「友・達・作・り!!手伝いなさいよ。」

「チツ、空耳じゃなかったか。」

軽く地面を蹴り溜息を漏らす。

「なによ、嫌そうね。」

「だって結果が・・・」

「なにっ!？」

結果見えてんじゃんと言おうとしたけど止めた、無駄だしね。

「じゃ、早速GO!!」

テンション高めに行く星奈の後ろから力無く続き、いきなり語りだした作戦を聞く。

「ある程度の段階をクリアしなければ友達は出来ないって、アタシは思っ訳よ。だから、そのきっかけを作ればいいのよね。」

「はぁ・・・」

「で、アンタは角から歩いてくる生徒と衝突しなさい、出来れば女子。」

「それで・・・?」

「アンタにビビってる女子生徒をアタシが庇うの。それできつとアタシに好感を抱いて尊敬してくれるはず!!」

ああ、つまり俺は使い捨ての駒と・・・人に怖がられるのってさ、案外心が傷つくんだぜ?って、星奈も少しは俺の気持ち^{コイツ}を理解できると思ってたんだが、言っても無駄か所詮は性格が残念な星奈だし・・・

少々失礼なことを考えたかもしれないが、これからの事や考える
と少しは許容の範囲内という奴だろう。

「じゃ、今よっ!!」

ドンツと背中を押し、結果突き飛ばすような形となった。突如として死角から現れた俺（元ヤン）にビビリ「きゃあ~~~~っ!」と言う悲鳴と共に腹部にブローを叩き込み逃げてしまった。これじゃどっちが被害者かは分らない。痛いです・・・

「何やってんのよバカ、誰が殴られるって言ったのよ!？」

「嫌々・・・めっちゃ恐ろしい子だよ、アレは・・・グフツ!!」
意識が一瞬飛んでしまった。目が覚めると教室で星奈の膝枕だった、ちよつと・・・訂正かなり幸せかも。

「おっ、起きたんならさっさと退きなさいよ!!」
「すいません・・・」

ゆつくりと頭を起こし、座る。もう日が沈み始めているし、友達作り大作戦は一時中止だろう。

「さあ、今日はもう帰りましょうか星奈様。」

「そうね、また明日やってみましょ。明日も気絶したら許さないから」

「はあ・・・無茶ばかり言わないで下さいよ・・・」

「アンタのことは高く買ってやってんのよ、ありがたく思いなさい!」

確かに他の男子生徒とは扱いが違う。まるで側近のような感じに接してくる。

「ああ~~~~っ!!!!」

「今度は何ですか?」

不意に掲示板に貼られた部員勧誘のポスターを指さす。

「コレをみなさい!!」

「なんすか、このガキが描いたみたい那不気味な絵は?」

オニギリの様な物に手足が生えている。人の様なものがソレに頭からカジリ付こうとしている。かなり怖いですよ、コレ。ああ、き

つとコレは描いた奴は『進撃。巨人』の大ファンなんだな。俺はそこまで好きじゃないし、絵も微妙だと思うけど・・・

「『進撃。巨人』のワンシーンですかね・・・？」

「そつちじゃないわよ！アンタの目は節穴なの！？」

「はい？」

「この文を読んでみなさい、文を！！」

「ええ、なにになに・・・」

とにかく臨機応変に隣人

とも善き関係を築くべく

からだと心を健全に鍛え

たびだちのその日まで、

共に想い募らせ励まし合い

皆の信望を集める人間になろう！

だと？」

「分かった？」

「さっぱりですね。」

「はあゝとんだ無能ね、斜めに読んでみなさい！」

「人べにひせ集・・・？」

「逆よ、逆！！」

「ええゝ何々・・・ともだち募集だあ？」

「そうよ、本当に気が付かなかったわけ？」

「まあ、そうなりますね。」

「ホント残念ね。アタシの実力を思い知った？正直な感想を言ってみなさい。」

「ホントこの馬鹿みたいな暗号を解ける星奈もコレを作った奴と同じレベルの脳味噌だよ！！」とは流石に言えないので、ココは煽おたてておくべきか。

「流石星奈様、惚れ惚れしますね。
(棒読み)」

「でしょでしょ、もっと敬いなさい。」

「まあ、もう帰りましょ。明日で良いでしょう？妹が空腹な状態で待ってるんですから」

「仕方ないわねえ」

今日は無事帰宅した。

『今日の成果：八代陸奥の噂に強姦疑惑が追加された』

晉

放課後になると慌てた感じで星奈と共に『談話室4』と表記された部屋の前まで来ていた。まったくもって何かに熱中している星奈の行動力には驚かされる・・・

「ココね。良い陸奥、何事も笑顔と第一印象が大切なのよ。まあ、このアタシを拒むような愚民は居ないでしょうけどね」

「まあ、やるだけやってみましょうか」

コンコンとノックすると開かれたドア。そこには見覚えのある顔が二つあった。それを気にした風ではなく喋り出す星奈。

「隣人部ってのはここね？二人入部したいんだけど」

「違う！」

[illegible]

「ちよつと、なんで閉めるのよ！！アタシは入部」

「リア充は死ね、カップルはお断りだ!!」

星奈が再度開いた扉を跳び蹴りで閉め、星奈は鼻を強打してしま

った。

「星奈様・・・大丈夫か？」

「うっ、うっう・・・」

鼻を押さえ涙ぐむ星奈。なんか淒く可愛い。今なら何でも言うこと聞いてやりたい・・・

「陸奥う・・・なんで、なんでこんな目に遭うのよぉアタシは友達に欲しいだけなのに・・・」

泣き出す星奈を見てると何だろう、助けたく成ってきた。星奈だって純粹に友達が欲しいんだよな、性格に少し難があるだけで。

「大丈夫ですよ星奈様。俺が何とかしてあげますから。」
そう言い、ドアをノックする。

「さっさと帰れ!!」

ドア越しに響く声。何とも不機嫌そうだ。でもココで引き下がったら男が廃るという奴です。

「五秒以内に開けないとドアをぶち破りますよぉ？」

宣言した瞬間に鍵の掛けられたドアを蹴破り、開いた穴に片手を突っ込み内側から鍵を開ける。

「一秒も待つてないだろ!!」

「は？」

「どうするんだ、この扉は!？」

「木製なのが悪いんじゃないかな？星奈様ブチ破り・・・じゃないや、開けましたよ。」

「うう・・・ありがと陸奥。」

ようやく泣き止んだ星奈の頭を愛撫しながら談話室4のソファに座る。

「アタシってほら、完璧じゃない。頭脳明晰、スポーツ万能、そして見ての通り美少女。神がオーダーメイドして創ったとは思えない完璧な造形美じゃない？天の不平等を嘆く自由を与えるわ庶民ども。」

キヤッチコピー
出ました柏崎星奈の口癖。さっきまで泣いていたとは思えない。

「下品な乳牛のくせに」

「あら貧乳が何か言ってるわよ、陸奥。」

「左様で・・・」

「・・・自分より胸が大きい女を全員殺せば相対的に私が巨乳になるな」

「そんな事、俺がさせるとでも？」「やめとけ」

デパートで星奈をナンパ・・・じゃなかった、道を聞いてたいた黄土色の頭をしたヤンキーと声が被ってしまった・・・

「・・・で、えーと友達が欲しいって話だけど」

「・・・お前いつも男に囲まれてるだろ、今とかも」

「わかってないわね、あんなのはただの下僕。コイツは召使い兼護衛の様なもの。アタシが欲しいのは友達、特に同性の。家庭科の調理実習や修学旅行のグループ分けの時にム力つく台詞を吐かれないようにアタシには友達が必要なの・・・！」

「・・・モテすぎたり優秀すぎる女は同性に疎まれるって話はたまに聞くな・・・」

「ふーん、アンタもヤンキーのくせにわかってるじゃない。踏んであげるからひざまずきなさい。」

「なんで俺がお前に踏まれなきゃならないんだ？」

「うちのクラスの男子はご褒美に踏んであげたり靴を舐めさせてあげるって言ったら何でも言うこと聞いてくれるわよ？まっ、まさか傲慢にもそれ以上を求めているわけ？流石はヤンキーね・・・ニッ、ニーソックスで縛ってなんてあげないんだからね！この変態！！」

一人で迷走する星奈に手刀を優しくぶつけ、正気に戻す。

「落ち着けよ。初対面・・・じゃないけど、失礼だろ？ああ・・・」

コイツにはそう言う概念が無いんだった、忘れてた。

「嫌良いんだ、コイツは性格がアレなんだろ？」

「ご名答。お察しの通りだよ・・・はあ・・・」

「ふう・・・流石夜空の作ったあのポスターの真意を読み取っただけのことはある。」

「その発言からは何故か私を侮辱するような意志が感じられるな。」
「気のせいだ。」

「へえ．．．あのポスターは三日月さんが作っただ．．．なんかお互い苦労してるっぽいね．．．」

「ああ、まっただ。」

「俺は八代陸奥、宜しく。」

「ああ、俺は羽瀬川小鷹だ。」

「まあ、取りあえず．．．」

「ああ、そうだな。」

「「良かったな二人とも、これで普段一緒に過ごす友達ができるわけだろ？」」

「「はあ？」」

ハモリにハモリで返された．．．しかも不機嫌そうな感じで．．．そしてこの二人の言い争いの火蓋が切って落とされた。

「どうして私がこんなのと友達にならなければならぬのだ？」

「アタシ、こんなのと友達になりたくないんだけど」

「初対面でなんでそんなに仲が悪いんだ、お前は．．．」

「むしろスゴい相性だけだね。」

「コイツの性格が悪すぎるのよ、凡人はパーフェクトなアタシにひざまずくものなの．．．」

「頭が悪いお前よりマシだ」

「アタシは成績学年トップよ！」

「はいはい、牛女ちゃんはお勉強がよくできまぢゅね、すごいでぢゅ」

三日月の小馬鹿にした態度が頭に着たらしく既に星奈の目には涙が溜まり始めていた。ホント性格に難があるのにピンチになると泣き出しそうになるのは勘弁して欲しい、可愛いから．．．

「．．．あぐ．．．あんたマジで性格悪いわね．．．でもアタシ、絶対この部に入るわよ。入部届けも持ってきたんだから！」

「ちっ」

「・・・なんか文句あるわけ？」

「ある、出ていけ。あ、違った、死ぬ。」

「~~~~~っ！！」

我慢の限界を迎えた星奈が立ち上がり三日月に殴り掛かるうとした。それを星奈の腕を掴み止めると信じていた人に裏切られた様な絶望に満ち溢れた表情に変わり談話室4と飛び出してしまった。それを理解するのに5秒あまりかかった。二人に軽く頭を下げ星奈と自分の鞆二つを掴み、星奈が出ていった扉をくぐり、後を追う。僅か5秒の差がココまでキツいなんて・・・

「星奈様、待つて・・・くだ・・・さい・・・！！」

重たい鞆を二つ持ち、運動神経抜群な星奈に追い付くのは難しいかもしれない。無茶かもしれない・・・でも、無理ではない。渾身の力を出し切り、足に全神経を集中させ最後のスパートへ入る。持っていた鞆を無人のベンチに放り出し、後ろから思い切り抱きしめた。

「ったく・・・足・・・速すぎなんすよ・・・」

ゼエ、ゼエと息を切らしながら、熱い吐息を漏らしながら、熱く火照った体で、それでも気にせず星奈を抱きしめる。彼女は俺を信じていたのかもしれない、自分だけは裏切らないと・・・それは過信だと言つてやりたいけど、命の恩人にまだ飯を返し切れていない以上は、彼女の側にいたい。その感情が『彼女を好きだ』と言うものだと理解しているのに、言い訳がましい台詞だよ、本当・・・

「星奈・・・？」

「うるさい、離せっ！」

背後から抱きしめていたら少しは大人しいかと思ったのに、後頭部で鼻を攻撃しやがった、踵で爪先を踏みやがった、抱きしめた腕を力一杯噛みやがった・・・痛みのあまり離すと顔を引っ掻かれ、頬に3つ線が入りプクプクと小さな血の玉が溢れ徐々に結合し下へ垂れ落ちていく。それでも休むことなく殴り続ける星奈。これが彼女の内面に受けた痛みだと自分に言い聞かせ耐える。そして少し後

退った瞬間に足がモツれ後ろへと倒れ、無意識に星奈の手を引つ張ってしまった・・・星奈に馬乗りされたような状態で、キツく目を閉じた星奈。優しく頭をポンポンと叩くと怯えたようにビクツと震える。

「大丈夫ですよ、星奈様。むしろ立って下さい、明日俺が学校で殺されますから・・・」

「陸奥・・・っ！ゴメン、顔に傷入っちゃった・・・こんなに血も出てるし・・・どうしよう・・・」

急に我に返り、自分の傷付けた顔を心配する星奈。

「大丈夫ですよ。少しヒリヒリしますが、この程度なら数日で治るでしょう。それよりも・・・ゴメンね。」

「えっ？」

「少しは庇ってやれば良かったのに・・・」

「うんうん、アタシは全然平気だから・・・その・・・アタシこそゴメン・・・」

「その・・・立って貰えますか？」

「えっ、何で？」

「生徒が一杯見てるからです・・・」

「っ！！」

また顔面に拳が入った。もうダメみたい・・・

『今日の成果』

忪、八代陸奥に新たな仲間が加わった。これで嫌な噂のレベルが上がるぞ！

忪、八代陸奥と柏崎星奈の好感度が上がった。八代陸奥に敵意を抱いた生徒が一気に増えた。

忪、八代陸奥は隣人部に強制入部させられた。』

入部は突然に（後書き）

星奈可愛いなあゝ・・・

部の活動・・・ゲーム？

「やっぱりゲームだと思うのだ。」と突然に三日月夜空が言い出したのは、先週末の事。つまりは、金曜日のことである。

「ゲーム？」

「夜空・・・だからゲームで釣れるのは子供ぐらいだって」

星奈が聞き返し、小鷹が遠慮がちに意見を述べる。

「甘い小鷹。昨日一人でファミレスに行ったら、後ろの席がやけに騒がしくてとても不愉快だったのだが・・・」

ああ、ファミレスに一人で行ったのか・・・と、言う感想は敢えて言わないでおく。星奈もたまに一人で行くからさ・・・

「見たら4人の高校生が楽しそうにコレをやっていた。」

そう言うとり出したのは、SOMYのプレイング・ステイツ・ポータブル（略称PSP）だった。

「PSP？」

まあ彼女がそんな物を取り出したと言うことは、つまり一緒にゲームをしようと言う意味合いなのは間違いないはずだ。なぜなら、定価15,000円そこその電子機器など至って珍しくも無い。まさか高校生がそんな物をこれ見よがしに自慢するはずが無いからだ。彼女の事は詳しく知らないが、話の流れ的にも間違っていないはず。

「どうやら今時の高校生の間では、携帯ゲームを持ち寄って通信プレイするのが流行っているらしい。」

「だからなによ？」

その高校生達がやっていたのは、『モンスター狩人』と言うゲームらしい。このゲームは他人と協力して遊ぶことが出来るとかでヒット中らしく、三日月夜空以外でもわりと身近に持つてゐる奴がいた。俺の大きい方の妹も友人と持ち会ってコレをしているらしい。

「上手いプレイヤーは他のプレイヤーに頼られるから、ゲームをや

っている内にいつの間にか仲良くなれると言うわけだ。それにアイテム交換も出来るから「このアイテムが欲しいんだけど持ってない？」とか、「このレアアイテムと、そのアイテム交換しない？」みたいな感じで話しかけるきっかけも作りやすい。」

「・・・うちのクラスの女子にもやってる子がいたわね。最近の女の子でもゲームするみたい。」

「俺の大きい方の妹もやってたみたいだしね。」

「つまり部活でこのゲームの腕を磨いたり、レアアイテムを手に入れた友達を作るうってわけだな？」

コクリと頷き、立ち上がる。

「・・・では、来週の月曜日PSPとモン狩を持ってくること。」

と言うのが俺の回想である。今は星奈の家でモン狩してます。どうやって入手したかって？

・・・妹に土下座して借りました、買う金が無かったからさ・・・

「それじゃ、始めるわよ？」

「星奈様のレベルは？」

「レベル3の終盤よ！どう、凄いでしょ！？アンタは？」

「え、レベル5です。妹のデータのままですから、友達ともやってたみたいですし」

「はあー！？そんなリア充は死ね！アンタも最初からやりなさいよっ！！」

「死ねとか言うな、お前が死ね。ってか、最初からとかめんどくせえ。」

「この私が手伝ってやるんだからーから始めなさい！！」

「・・・分かりましたよ。」

早速新規データを製作し、初めのムービーをスキップする。話しかけてくるNCPの台詞を完全無視し、会話を読まずに進めて準備完了。直前に星奈から頭を叩かれた。

「割りと痛いぞ。」

「ちゃんと村長の話を聞きなさいよ!!」

「はい?村長の意見を尊重しろと?」

また叩かれた。しかも割りと強めに・・・

「だから痛いぞ!」

語気を強めると星奈が怯えてしまった。ヤベツ、可愛い・・・
と言う感想を内心へ押し込めて、ソファーに座り直す。それにしても、このソファーはフカフカで気持ち良いな。絶対この上で寝たら身体壊すな、うん。

「じゃ、じゃゝ始めるわよ?その・・・キークエスト貼るからね?」

「キークエスト?」

「アンタ、マジで初心者なのね。まあゝ良いわ、完璧な私がアンタの為に分かりやすく説明してあげるわ。」

「ありがたい。」

「キークエストってのは、物語を進める為に必要なクエスト。授業で言ったら必須科目みたいな物ね。」

「で、誰に聞いたんだ?」

「っ!!・・・なんでそんな事聞くのよ?」

「いやゝ気になったただだよ。で、どの下僕に聞いたんだ?」

「ムウゝ・・・コレくれた奴。」

「ちゃんとお礼言ったのか?」

「勿論よ、カ一杯踏んでやったわ!!」

誇らしげにPSPを見せつけたあとに、魅惑のボディ・・・と言うか、胸を張った星奈にデコピンしてやった。いくら可愛くても力ツアゲは良くないだろ。まあ、両本人がOKなら俺が口を出す事はないのだがね。

「痛いわね、バカッ!!」

「イヤゝ星奈様が可愛すぎて、ついつい意地悪してみたくなりまして。ゴメンね」

「まあ、それならそれで良いけど。次はもう少し優しく・・・後ろから抱き締めたりしなさいよ。」

「えっ、今なんて言ったんだ？つてゝな、またかよ！」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかったから聞き返したら殴られた。顔をグーで・・・

「星奈様、もう始めよう？もう喋ると疲れるって事が判明したからさ・・・」

今日の短時間で一気にレベルが上がった。俺の要領の良さも自慢できるレベルだと自負するけど、星奈は尋常じゃないレベルで上手かった。2、3クエストはノーダメでクリアするし、所要時間の10分に満たなかったり・・・

取り敢えず、星奈には驚かされる事が多い。玄関の前までお見送りして貰えたし黙ってれば完璧なんだよね、彼女の場合は・・・

「じゃゝね、陸奥。帰ってもちゃんとプレイしなさいよ？明日はバカ夜空をボコボコにしてやるんだから！！」

「ハイハイ、分かってますよ。でも熱中し過ぎて睡眠不足ってのはよしてくださいね、体にも肌にも悪いですから・・・」

「分かってるわよ、心配性ね。じゃ、また明日学校で会いましょ」

「ああ、それじゃお邪魔しました。」

「ばいばい」

手を振る星奈に振り返しながら帰路へ着く。夕暮れを過ぎ、真っ暗な公園を突き抜けようと草木を掻き分け無理矢理侵入する。中には若い男女が居た。一人は制服を着た男子、もう一人は長い袋を携えた女性。竹刀でも帯刀してるのか？と疑問に思い眺めていると男子の方がコチラへ歩み寄ってきた。

「八代君？八代陸奥君だよな？」

「君は・・・俺の友人か？」

「えっ？何言ってるの？・・・ああ、そう言う事なんだ。陸奥君も色々不幸な目に遭ってるんだ。」

「ん？・・・ん？何の話をしてるんだ？」

「記憶、喪失なんですよ？僕の名前は高崎良人、紅海高校の二年。小中は同じ学校だったんだけどね」

「そうか・・・で、何で記憶喪失だと分かった？」

「聞いたんだよ、君を加護してくれてる奴に」

「俺を加護してくれてる奴？」

「世間一般では、守護霊って言うね。君の死んだお母さんだよ。」

「母さん・・・だと？」

「そう、君の事を本当に心配して見守っている。」

「ふゝん・・・って、信じられるかあゝ！！」

適当な事を言う彼に手刀した。

「痛いじゃないか」

「信じられるか、そんな話。」

「仕方ないじゃないか、事実なんだから」

「そうか・・・俺の母さんはどんな人だったんだ？」

「んゝ・・・明るくていい人だったみたいだね。最近の心配は柏崎星奈と間違いを起こさないか・・・だつてさ」

「へえゝあながち嘘でもないようだな。」

「信じてくれた？」

「ああ、そうだな。信じるよ。」

「そんな君にはアドバイスゝ最近は物騒だから気を付けてねゝこんな時間ならまだ良いけど・・・もっと遅い時間だと吸われるから・・・」

・

「吸われる？」

「血を・・・吸われるんだ。」

「蚊に？ヒルに？ダニに？」

「違うよ、吸血鬼に。血を吸う鬼に・・・襲われて、眷族にされるか・・・最悪殺される。」

「吸血鬼？ヴァンパイア？」

「そう言う言い方もあるね。何かあったらメールなり電話なりしてよ、はいアド交換しよう」

そう言うのとケータイを取り出してＩＣ交換を済ませる。

「そうそう、さっきの話半分冗談だから忘れてね」

そう言うて闇の中に消えてしまった。

「どこからどこまでが冗談だったんだ？」

暗がりをポツポツと歩き出し家路に戻る。

「・・・吸血鬼に気を付けろ、か。」

部の活動・・・ゲーム？（後書き）

オリジナル小説のキャラを出してみました。

これから少しずつオリキャラ同士をコラボさせて行こうと思います

気に食わなかったらごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784x/>

主人は友達が少ない

2011年12月1日21時51分発行